オペラ／声楽

みつなかオペラ モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》

12月11日・川西市みつなかホール●牧村邦彦（指揮）、井原広樹（演出）、桝 貴志（ドン・ジョヴァンニ）、山田大智（騎士長）、梨谷桃子（ドンナ・アンナ）、島影聖人（ドン・オッタヴィオ）、和泉万里子（ドンナ・エルヴィーラ）、松森 治（レポレッロ）、下林一也（マゼット）、村岡 瞳（ツェルリーナ）、ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、みつなかオペラ合唱団（合唱指揮：岩城拓也）

序曲の最初の暗い響きが、その後のオペラ展開を多面から支配するような雰囲気だった。《ドン・ジョヴァンニ》を、貴族社会の終焉を通して、現代社会の行く末をも暗示するメルクマール的存在として演出した井原広樹の想いに寄り添う音構成である。登場人物たちのイタリア語発声は実に明晰に響いていたが、アリアよりレチタティーヴォの対話のほうがよりリアルに劇進行を盛り上げる。それを最も劇的に提示したのが第2幕のレポレッロとジョヴァンニが入れ替わるシーン。いつも無理難題を押しつけられるレポレッロが被雇用者の立場を嘆きながらも、幾ばくかの「お金」で入れ替わりを受け入れてしまう卑屈な自己放棄は、現代社会の民衆にとっても笑い飛ばせない〝凄み〟となって舞台を印象づけた。そのレポレッロをジョヴァンニと思い込んだドンナ・エルヴィーラが愛を告白する。その想いは劇の筋を二重、三重に膨らませ、中世社会からの脱出を希求する女性の内面としても描き出された。チェンバロの低い伴奏がその雰囲気を実に効果的に強調していた。終結の場面近く、騎士長の亡霊がジョヴァンニに「悔い改め、生きかたを変えよ」と迫るのを決然と拒否して地獄落ちするジョヴァンニは〝変革者〟としてクローズアップされていた。物語の表面的な筋道をある意味でバラバラに解体しながらも、時代、歴史と対決する人間像を描き出す。モーツァルトの多面的な起伏を孕んだ音楽が、そのドラマトゥルギーをバックアップしていた。演出によって新たな光を当てられた《ドン・ジョヴァンニ》と言えるだろう。

●嶋田邦雄